

「御南地区街づくり協議会」生れる

私どもの住む御南地区は、従来岡山市の副都心といわれてきた地域であります。それが今では、公共的な事業は殆んど行われず、放置されたままになっております。田中地区も俗称50メートル道路、笹が瀬川の改修、消防署の出張所等の工事は進んでおらず、先の見通しもない現状にあります。又地区割、総合支所の問題も住民感情を逆なでする方向で決まりつつあります。

考えてみますと、こうした面の情報の遅れがそのまま対応の遅れとなっております。これは関係当局に強力に働きかける地元の強固な組織や人がないことにも、大きな原因があるのではないかと云われております。

したがってこの問題に 대응するために、先般御南地区（西学区・御南学区）の各種団体の代表者による「街づくり協議会」が発足致しました。当地区の街づくりにかかわる課題を解決していく推進母体としての機能が、十分発揮されることが期待されています。

【連載】 わが郷土を語る（その30）
中尾 佐之吉

昔、学校はなくとも勉強はしていた

1) 文字が分からなくては暦が読めない

江戸時代後半でも、暦は400万部も出版されていたと、ある本（注1）に書かれている。当時、これはおよそ一家に一部の割合だとか。それだけ暦が重要視され読まれていたことになる。その頃の暦は、現在の太陽暦でなく太陰暦であったが、季節的社会的行事（例・正月、春分、彼岸、冬至節分、社日、土用）や日の吉凶ばかりでなく、人々の運勢までも分かるという、庶民にとっては無くてはならない生活指針の役割をもっていたにちがいない。それにしても、字を知らねば暦も読めない。また、読み書きができなければ商売も営めない。百性でも商取引に参加する時勢になってきている筈だ。（注2）そうであれば、今のように学校のない時代、どのようにして勉強していたのであろうか。そして国民はどの程度文字を知っていたのだろうか。参考書をあれこれさがして読んでみた。

2) 江戸時代の識字率は？

ロシアの海軍少佐グロヴニンはその著「日本幽囚記」（1816年出版）で「日本には読み書きの出来ない人間は一人もいない」とベタ褒めであるが、これはチョット過大評価と言わざるをえない（注3）。司馬遼太郎氏は「江戸末期の識字率は70%以上で同時代の世界で類がない。」と書かれている。（同氏著「風塵抄」）だが、元駐日大使のライシャワーさんは「江戸期の日本の識字率は、男子45%女子15%で当時の欧米先進国とあまり違わない」と同氏著「ザ・ジャパニーズ」に書いておられる。しかし、いずれが正しいかはここで論議しようとは思わない。当時のわが国の教育水準が高く国民がよく勉強していたことがわかればよい。とはいえ、私の知りたいのはこの地区のことである。

3) この地区で、学校の無い頃勉強はどこで？

明治維新となって、新政府は、「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」として、明治5年に学制が定められた。しかし、だからといって全国に小学校がただちに設立されたわけではない。今地区でも、明治6年から、取りあえず、辰巳村や中仙道村での私塾を学校としたようで、独立の校舎をもつ小学校（4年制）は、「順則小学校」の校名で、明治9年辰巳村に設立されたのが初めてである。

以上は前置きで、主題の、学校のなかった明治4年以前のことを書かねならない。このことを知りたいと「岡山市史（S43年刊）」についてみると、市内に開設されていた「寺小屋」の記事がある。そして、今地区で寺小屋があったことを初めて知った。さらに、田中野田の原 房五郎さんが塾を開き教師をされていたことも。（寺小屋と言っても、この場合は主として読み書きを教える私塾で教室は大体本人の住宅や納屋であった）

今地区内の寺小屋

所在地	開業	廃業	男生徒	女生徒	教師
中仙道村	安政3年	明治5年	18	7	長瀬 直正
〃	嘉永6年	〃	20	20	轟明 整
西長瀬村	慶応3年	〃	15	6	金輪清次郎
今村	〃 元年	明治3年	23	8	大森 晁平
田中村	明治4年	明治5年	18	7	原 房五郎
辰巳村	〃	〃	6	5	延友 清一
〃	〃	〃	16	5	長瀬 浪次
合計（注4）			116人	58人	

教師先生方の略歴大要（分かった方のみ—敬称略）

氏名	出生年	死亡年	現世帯主との関係	公職経歴
長瀬 直正	不明	不明	（大阪へ転出）	白鬚官神官
轟明 整	弘化4年	明治17年	轟明千恵子の祖父	戸長、教員、郡書
原 房五郎	嘉永5年	大正8年	原 一郎の曾祖父	村会議員、収入役
長瀬 浪次	嘉永4年	明治43年	長瀬孝一の祖父	順則小学校校長 今村 〃 今村助役

追記 上表でみると長瀬浪次は20歳で、原 房五郎は19歳で塾を始められる。明治維新の大変革に際し、若い情熱を、次代を担う少年の教育に注がんと、希望に燃えての決意の表れであろうと想像する。浪次青年や房五郎青年がどこで勉強されたのであろうか、知りたいが今では不可能。多分、岡山城下町の漢学塾だろうと推察するのみである。（当時、市中の漢学塾は40カ所くらいであったようだ—岡山市史より）

注1 女子美大教授、暦の会々岡田芳朗著「暦と運勢がわかる本」のことである。この本に、天保時代の暦の一部分を撮った写真が載っていたが、当時は木版刷りで、文字も漢字は行書体、ひら仮名はみみずがはったような変体があるのであるから、私らには大変読みにくい。昔の人は、これがあたりまえとして字を習っていたのだらうから、そも思わなかったのだらうか。（文字より暦をどう理解するかが、もっと重要だが、ここではふれない。）

注2 福沢諭吉の「福翁自伝」で、安政2年、下関から大坂へ船で行くについて、中津の鉄屋惣兵衛から下ノ関の船場屋寿久右衛門あての二セ手紙を書いて「賄代の後払い」を認めてもらっている。このことは、諭吉が旅費の不足で苦肉の策をとったことの説明であるが、ここでは、双方の商人が字が読めたり書いたりできることの証明であるとともに、読み書きの能力がなければ商売もできないということの証しの一例としてとりあげてみた。

また、早島町では今から290年くらい前の宝永年間に、裏作として蕎麦草が盛んに栽培されていたそうだから、（同町歴史資料館の資料による）この地方でも、同じ頃、蕎麦草が栽培され量表も織られたことと思う。そして当然に、蕎麦製品の売買もおこなわれたであろう。したがって、農民でも計算ができなければならず、字も書けたり読めたりする必要があったにちがいない。

注3 グロヴニンさんは、1811年国後島で捕らえられ、26ヶ月余日本に抑留された後釈放されたロシア軍人であるが、この短い期間でよくも日本の事情を知悉し得たものと感心する。この本「幽囚記」で、日本人の識字率について述べたあと、さらにロシア人のことにふれ「ロシアには、学者も多勢いる。しかし、天文学者一人について3つの数も読みこなせない人間が千人もいる。」と嘆いている。天文学者が何人いるのかが不明なので、数の分からない者の人口割合も計算できないが、グロヴニンさんも、算数に強い日本人に接してつい愚痴がでたのであろう。

注4 当時の今地区の人口は分からないが、仮に明治12年の人口（今村史所載のものに一部推定を含む）に、今村の大正12年年齢別人口構成から割りだした6-9歳の推定人口比率8%を乗じて得た要就学人口は162人となる。この数と、当時の今地区の寺小屋の就学者数男116人女58人合計174人という数字とを単純には比較できないが、想像より多くの人が勉強していたのに驚かされる。

町内カレントニュース

平成9年度に御南中学校は創立50周年を迎え、その開校記念日（4月28日・月曜日）に記念行事が行われます。

編集後記：特集に3編の玉稿をいただき、ありがとうございました。次号（4月1日発行）には御南中学創立50周年関連記事を取りあげる予定です。